50年代のハード・バップ期に頭角を現したミュージシャンのなかでアルト・サックスのフィル・ウッズほど息の長いミュージシャンはほかに見あたらない。なにもアルト・サックスの分野に限っていっているのではない。すべての楽器分野を見渡してもフィル・ウッズに対抗できる現役のミュージシャンはほかにいないのだ。ちなみにフィル・ウッズが初めてダウンビート誌の「国際ジャズ批評家投票」アルト・サックス部門の＜ニュー・スター＞第1位に選出されたのは1956年のことだったが、この年に同投票で各楽器分野のトップに輝いたミュージシャンのうち、いまも現役で活躍しているのはフィルを除くとドラムスのチコ・ハミルトン だけ（！）というのが現状なのである。

ここで参考までに1956年度のクリティック・ポールのウイナーを列記（かっこ内はニュー・スター）しておくと、トランペット：ディジー・ガレスピー（サド・ジョーンズ）、トロンボーン：J.J.ジョンソン（ベニー・パウエル）、アルト・サックス：ベニー・カーター（フィル・ウッズ）、テナー・サックス：レスター・ヤング（ボビー・ジャズバー）、バリトン・サックス：ハリー・カーネイ（ジミー・ジュフリー）、クラリネット：ベニー・グッドマン（バディ・コレット）、ギター：タル・ファーロウ（ディック・ガルシア）、ピアノ：アート・テイタム（ハンプトン・ホーズ）、ベース：オスカー・ペティフォード（ポール・チェンバース）、ドラムス：ジョー・ジョーンズ（チコ・ハミルトン）、ヴァイブ：ミルト・ジャクソン（テリー・ポラード）、ビッグ・バンド：カウント・ベイシー（なし）、コンボ：MJQ（なし）、男性歌手：ルイ・アームストロング（ジョー・ターナー）、女性歌手：エラ・フィッツジェラルド（バーバラ・リー）となっている。これからも判るように大御所連をフィルと同世代の当時のニュー・スターたちも、いまではそのほとんどが故人となってしまっているのだ。フィル・ウッズは1931年の生まれだから、71歳になるが、「国際ジャズ批評家投票」のニュー・スターに選出されたとき彼は弱冠25歳だった。ウッズは1948年から52年にかけてはクラシックの全米屈指の名門校ジュリアード音楽院に学んでおり、本格的なプロ生活に入ったのは卒業した年の1952年（チャーリー・パーキット楽団）からで、逆算すると彼の音楽生活はこのアルバムが録音された2002年でちょうど50周年を迎えたことになるのである。

初めに、フィル・ウッズは“息の長いミュージシャン”と紹介したが、ここでいう“息の長い”という意味は単に現役としての活躍期間の長さをいっているわけではない。そうではなくて、ここで強調しておきたいのは、彼が、長いキャリアを通じて、つねにトップの座を独走しつづけてきたということを言いたかったのである。たとえば、先に引き合いに出したダウンビート誌の「国際ジャズ批評家投票」だが、1956年に＜ニュー・スター＞賞に輝いたあと、彼は1963年にクラリネットのニュー・スターに選出され、その後アルト・サックスのベテラン部門で1975年に初めてトップについてからは1979年、1981年～1990年、1992年、1996年、1997年、2000年、2001年と通算19回も王座に輝いているのである。加えて同じ批評家投票のコンボ部門でもフィル・ウッズが率いるクインテットは1988年、1989年、1991年、1992年、1996年～1998年と通算7回にわたって首位に選出されている。このほかダウンビート誌の読者人気投票の結果で見てみると、ウッズはアルト・サックス部門を1976年～1995年まで2000年と2001年に従しており通算22年間も第1位の座を独占し続けているのだ。チャーリー・パーカーが登場して以降、50年代、60年代はリー・コニッツ、キャノンボール・アダレイ、ジャッキー・マクリーン、ポール・デスモンド、アート・ペッパー、オーネット・コールマン、エリック・ドルフィーといったアルト・サックスの名手達が覇を競い合ったが、その黄金時代が一段落してからは、フィル・ウッズの本領の発揮が続いているのである。

この間、フィル・ウッズは第1人者として数々の名誉にも輝いてきた。1976年に初めてグラミー賞に輝いたのを皮切りに、1977年、1982年、1983年にも授賞しているし、1989年にはフランス政府から芸術文化勲章を贈られている。

こうした輝かしい経歴を持ちながらフィル・ウッズが半世紀を経たいまもいささかもプレイに衰えを感じさせないで、初期のころに見せたバイタリティと情熱的でホットな演奏を聞かせつづけていることには、改めて彼のプレイヤーとしての“息の長さ”に驚嘆せざるを得ない。この最新のアルバムはまたまたそれを裏付けている。そしてこのアルバムはフィルにとっては1975年以来久々にストリングスを組んで演奏するというエキサイティングなイベントになった。フィルがストリングスと共演してアルバムをつくったのは1969年に録音した「ラウンド・トリップ」というアルバムが初めてだった。もっともこのときはフィルは一部でストリングスと共演しているに過ぎない。その後、1975年にフランスのミッシェル・ルグランとコンビを組んで双頭で吹き込んだ「イメージス」（グラミー賞受賞作）でもストリングは使われたし、同じ年の「ザ・ニュー・フィル・ウッズ・アルバム」ではストリングスとブラスがレコーディングに加わっていている。このように過去にも、彼は様々な試みに挑戦してきているのだ。

しかし、この作品のようにアルバム全体がフィル・ウッズ・カルテットとストリングスの共演という形で統一された企画は、彼の長いキャリアの上でも今回が初めてのことといっていい。

ところで、このアルバムに登場するフィル・ウッズ・カルテットのメンバーについても触れておきたい。まずはじめに、1995年からグループのピアニストに抜擢されたビル・チャーラップ（1966年10月15日、ニューヨークの生まれ）だが、彼は2002年にはダウンビート誌の『国際ジャズ批評家投票』ピアノ部門の＜注目のタレント＞第1位に選出されるなど、いま若手のなかではもっとも将来が期待されている一人だ。ハンク・ジョーンズとビル・エヴァンスの中間を目指すエレガントでリリカルなスタイルの持ち主だが、このアルバムでも随所に見事なソロを聞かせてくれる。なかでも＜スリル・イズ・ゴーン＞や＜ソリチュード＞でのピルのプレイは素晴らしい。ピルは自己名義のアルバムをすでにいくつもリリースしているが、1998年にトリオで録音した「ス・ワンダフル」（Venus TKCV-35078)は「スイングジャーナル」の＜ゴールド・ディスク＞にも選定されている。ベーシストのスティーブ・ギルモア（1943年1月21日、ニュー・ジャージー州トレントンの生まれ）とドラムスのビル・グッドウィン（1942年1月8日、ロサンゼルス生まれ）の2人は、ともに1974年以来、フィル・ウッズのグループで活躍してきたベテラン達だ。ギルモアはカルテット・コーンとズート・シムスのクインテットやサド・ジョーンズ＝メル・ルイス・ジャズ・オーケストラなどで演奏した経験の持ち主。一方、グッドウィンはゲイリー・バートンとキース・ジャレットの双頭ユニットで1969年から71年にかけて演奏した実績があり、その後はスタン・ゲッツ、アル＆ズート、ジェリー・マリガンなどのグループで活躍している。ベースとドラムスのリズム・コンビが70年代の前半期からの仲間ということもあって、フィル・ウッズ・カルテットはいまやジャズ界でも有数の息のあったコンボとなっているのである。さてこのアルバムで演奏される曲目だが、アルバムの第1曲目と最後の9曲目にフィル・ウッズのオリジナルが配置されている。冒頭の＜アンド・ホエン・ウィアー・ヤング＞はウッズが1960年代に作曲した曲の一つで、1968年にフィル・ウッズとヨーロピアン・リズム・マシーンによって初吹き込みされたもの。その後もフィルは何度かレコーディングしているが、このストリングス・アルバムの録音の前には2000年にフィル・ウッズとイタリアン・リズム・マシーンによって録音されている。フィルのお気に入りのオリジナルで、この演奏では彼自身が編曲にあたり、パショネートなアルト・サックスのソロに続いてアンディ・スティンのヴァイオリン・ソロもフィーチャーしている。ラストに聞かれる＜ソリチュード＞はデューク・エリントンの曲とは同名異曲。フィルはこの曲を1969年録音の「ラウンド・トリップ」の中で初演している。この曲はフィルが「クマのプーさん」の作者としてしられる英国の作家A.A.ミルンが子供のためにつくった詩集「Now We Are Six」(1927年刊）の中の詩に触発されて作曲した曲で、彼の代表的な作品の一つになっている。このアレンジは彼自身がつけたもので、フィルのアルト・サックスとともにピル・チャーラップがイマジネイティブなソロを聞かせる。この二つのオリジナル曲の他にはさまれた7曲はどれもがよく知られたスタンダードであり、このあとは演奏にじっくりと耳を傾けていただきたい。

児山紀芳

The Thrill Is Gone
スリル・イズ・ゴーン
Phil Woods With Strings
フィル・ウッズ・ウィズ・ストリングス

1. アン・ホエン・ウィアー・ヤング
And When We're Young (P. Woods) (8:22)
Arranged by Phil Woods

2. アイ・ゲット・アロング・ウィズアウト・ユー・ベリー・ウェル
I Get Along Without You Very Well (H. Carmichael) (4:48)
Arranged by Eric Darnay

3. ユー・ゴート・ト・マイ・ヘッド
You Go To My Head (J. Fred Coots) (5:24)
Arranged by Brian Lynch

4. イット・ネバー・エンタード・マイ・マインド
It Never Entered My Mind (R. Rodgers) (8:53)
Arranged by Phil Woods and Brian Lynch

5. スリル・イズ・ゴーン
The Thrill Is Gone (B. Henderson) (4:41)
Arranged by Phil Woods and Eric Darnay

6. イメージス・ト・ゥ・ラブ
Easy To Love (C. Porter) (4:14)
Arranged by Eric Darnay

7. ニアネス・オブ・ユー
The Nearness Of You (H. Carmichael) (5:53)
Arranged by Eric Darnay

8. イフ・アイ・シュッド・ルーズ・ユー
If I Should Lose You (R. Rainger) (5:35)
Arranged by Phil Woods and Brian Lynch

9. ソリチュード
Solitude (P. Woods) (5:48)
Arranged by Phil Woods

フィル・ウッズ Phil Woods (alto sax)
ビル・チャーラップ Bill Charlap (piano)
スティーヴ・ギルモア Steve Gilmore (bass)
ビル・グッドウィン Bill Goodwin (drums)
エリック・ドニー Eric Doney (conductor)
アンディ・スティン Andy Stein (violin and solo)
トニー・ポスク Tony Posk (violin)
オリヴィア・コッペル Olivia Koppell (viola)
アルフレッド・ブラウン Alfred Brown (viola)
ジェシー・レヴィー Jesse Levy (cello)
Strings assembled by Andy Stein

録音：2002年6月16、17日　レッド・ロック・レコーディング・スタジオ、ペンシルバニア

℗© 2003 Venus Records, Inc.

Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan.
Co-Produced by Bill Goodwin.
Recorded at "The Red Rock Recording Studio"
in Pennsylvania on June 16 and 17, 2002.
Engineered by Kent Heckman. Technical Coordinator by Derek Kwan.
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound :
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.
Front Cover Photo ©Paul Folder / G. I. P. Tokyo.
Phil Woods plays the Phil Woods model Yamaha Saxophone Exclusively.
Special Thanks to Jim Murphy of the Yamaha Corporation.
Phil Woods use Vandoren Reeds.
Phil Woods is a Pacific Streets Recording Artist. Designed by Taz